

---

## ハン・ガン『少年が来る』クオン 2016年

---

### ◎各章立ておさらい

本作は1980年5月18日に起きた光州事件とその後を描く。

本作は以下の一章～六章と、エピローグで構成されている。

一章 - 幼い鳥 光州事件のトンホを「君」と呼んで描く。

二章 - 黒い吐息 殺されたチョンデの死者の視点。

三章 - 七つのピンタ 出版社のウンスク姉さん、戯曲集を出版しようとするも検閲される。

四章 - 鉄と血 チンス兄さんと同じ組の教育大の復学生。キム・チンスについて語る。

五章 - 夜の瞳 ソンジュ姉さんのその後。ソンヒとの再会。「あなた」と呼ばれる。

六章 - 花が咲いている方に トンホの母親が語る。

エピローグ- 雪に覆われたランプ 資料を読んで光州事件を記録しようとしている。

---

### ◎前史としての日韓併合(1910-1945)、朝鮮戦争(1950-1953)

1910年の韓国併合から1945年の日本の敗戦までの35年間、日本は朝鮮半島を植民地支配。

第二次大戦後、38度線の南側では、1948年に大韓民国政府樹立、アメリカに亡命していた李承晩(1875-1965)が初代大統領に就任。李承晩は武力によって挑戦半島を統一し、共産主義を排除する野望を抱いていた。

北側でも、1948年に朝鮮民主主義人民共和国が建国。金日成(1912-1994)が1948年にソ連、スターリンの手引きで最高指導者となる。金日成は1930年代、中国共産党の一員として満州の日本軍に対するゲリラ戦を戦っていた。

(NHK『映像の世紀バタフライエフェクト 朝鮮戦争 そして核がばらまかれた』2025.5.22)

日本は1910年から置き換え作業に取り掛かった。朝鮮の貴族階級の学者・官僚はおおかたが取り込まれるか解雇され、日本の支配エリートと置き換えられた。従来の行政機構に代わって強力な中央政府が置かれた。儒教の古典が日本の近代的教育に置き換えられた。やがて日本人は朝鮮の言語さえ日本語に置き換えた。(後略)

(ブルース・カミングス『朝鮮戦争論 忘れられたジェノサイド』明石書店)

1961年から1979年にかけて韓国に存在した朴正熙(1917-1979)の開発独裁政権は、1860年代以降、朝鮮半島で約一世紀にわたって、ほぼ絶え間なく続いた軍事化の流れから派生してきたものである。この軍事化の過程で生まれた民族主義的傾向を持つ軍事主義は、最終的にそれ

を土台として大韓民国軍を生み出し、それが1961年5月16日の朴正熙による権力掌握へと繋がっていったのである。このクーデター以降、約18年間にわたって、軍事主義の影響は韓国<sup>韓国</sup>の国家統治全体に広がり、特に1972年以降の権威主義的な維新体制期に、その影響は顕著となった。1979年に朴正熙が暗殺された後も、全斗煥<sup>チョンドフワン</sup>と盧泰愚<sup>ノテウ</sup>という二人の将軍がクーデターによって軍事政権を継承したため、軍事主義は韓国政治に影響を与え続けた。

1961年のクーデターの基盤であり、朴政権を特徴づけた軍事主義は、歴史的に見れば複数の源流を持ち、異なる時代の様々な軍隊から複雑な影響を受けている。しかし、本書が注目するのはその根源的源流ともいべき戦前の日本帝国陸軍の軍事文化と行動様式であり、とくに日本と満洲国の士官学校教育による影響である。実際、朴正熙は満洲国の軍官学校を経て日本の士官学校に留学したため、両校で教育を受けた経験があった。しかも、彼は人一倍まじめで熱心な生徒であり、両校の教育理念や訓練を極めて積極的に受け入れていたのである。そして、そこで彼の受けた教育や訓練は、後の朴正熙政権における統治のひな形となり、政治運営、経済開発、そして社会的動員といった国家のあらゆる活動に応用されることになったのである。

(カーター・J・エッカート『韓国軍事主義の起源』慶応義塾大学出版会)

## ▶日本の植民地支配を起源にもつ現代に至る朝鮮の歴史、「近代化」による統治

### ◎残忍性

おまえらが太極旗を振って愛国歌を歌うのがいかにお笑い種だったか、俺たちが思い知らせてやる。悪臭がぷんぷんする汚い体、傷が膿んで腐っていく体、飢えた獣みたいな体がまさにおまえらだってことを、俺たちが証明してやる。

(146頁)

何が問題だというのか？むち代を渡しながら人を殴れというのだから、殴らない理由がないじゃないか？

(164頁)

特別に残忍な軍人がいた。最初に資料に接しながら最も理解に苦しんだのは、容疑者として連行するという目的もないままに、何度も殺傷行為を重ねたことだった。罪の意識も躊躇もない白昼の暴力。そのように残忍性を発揮するよう激励し、命令したであろう指揮官たち。

一九七九年の秋、釜馬抗争を鎮圧する際に青瓦台の警護室長、車智澈<sup>チョンワデ</sup>は朴正熙にこう言ったと伝えられている。

カンボジアでは二百万人以上も殺しました。我々にそれができない理由はありません。

(259頁)

➡この残忍性をどのように考えるか。

逆説的だが、罪の意識や躊躇があるようでは、このような残忍性は発揮できないのではないか。むしろ、罪の意識も躊躇もともなわないからこそ、行使しうる残忍性なのではないか。

➡秩序や合理性の御旗の名の下にこそ、際限のない残忍性が発揮される。近代が孕む問題ではないか。興味深かったのは、次のくだり。

群衆の道徳性を左右する決定的な要因が何なのかはまだ明らかになっていない。興味深い事実は、群衆をつくる個々人の道徳的水準とは別に特定の倫理的な波動が現場で発生するということだ。ある群衆は商店での略奪や殺人、強姦をためらわず、ある群衆は個人であればたどり着き難いはずの利他性と勇気を獲得する。後者の個々人は、特別に崇高だったというよりも人間が根本的に備えている崇高さが群衆の力を借りて発現されたものであり、前者の個々人が特別に野蛮だったのではなく、人間の根源的な野蛮さが群衆の力を借りて極大化されたものだと言っている。

(116 頁)

[群衆について] 今村仁司『群衆 -モンスターの誕生』ちくま新書

- ・近代社会における人間存在の根本性格のひとつは、「群衆人間」(16 頁)
- ・大量生産社会としての資本主義社会は、まさに群衆人間を毎日生産する現場(18 頁)
- ・二十世紀のおぞましい政治的現実(ファシズム、ナチズム、スターリニズムなどの「全体主義政治」)は、群衆社会の結果であります。これに対して理性はまったく無力であったことは明らかです。偉大なドイツ古典哲学の子孫にして、「精神的・理性的民衆」を誇るドイツ国民は、ヒトラーとナチズムに対してどんな抵抗と批判をなしたのか。ドイツ国民は、批判と抵抗どころか、むしろ反対にナチズムに加担してしまったのではないのか、哲学者も民衆も。(18 頁)
- ・近代理性は「道具的理性」に変質する 道具的理性は、自律的個人ではなくて、量的存在としての群衆を効率的にあるいは計量的に処理していく(17 頁)

➡理性それ自体に群衆問題が胚胎している。「群衆への問いは、そのまま理性への問い」(18 頁)

私の考えでは、群衆は単なる「野蛮な集団」でもなく、また単なる「魅惑的な英雄的集団」でもありません。群衆は状況によって野蛮にも英雄的にもなることができます。それは超歴史的な集団に還元されるような人間集団ではなくて、たえず同一化願望に突き動かされて、自然発生的に大小の「指導者」を内部から産出して、個人はもとより、階級や身分をすら溶解させて、ついに等質的な群衆国家を建設するほどの巨大な勢力なのです。

(177 頁)

### ◎我々に残された問い

これからはあなたが私を導いていくように願っています。あなたが私を明るい方へ、光が差す方へ、花が咲いている方へ引っ張っていくように願っています。

(268 頁)

あなたが死んだ後、葬式ができず、私の生が葬式になりました。

(121 頁)

### ▶死者を引き継ぐことが示されている。

「死人に口なし」ではなく、死者が語る(転生する)。前回の課題図書、鈴木結生『ゲートはすべてを言った』で、(ゲートが言ったか、言っていなかったかの確証がなかったのにも関わらず)、博把統一がゲートの言葉として、「愛はすべてを混淆せず、渾然となす」と語ったように、不在の者の言葉を語るができる、ということを文学は示唆する。

残忍性は、生を奪う。しかし、死者を引き継ぐことを奪うことはできない。この小説全体が、死者を引き継いでいる。

多木浩二は『戦争論』岩波新書 で次のように書いている。

二〇世紀は戦争の連続だった。それらの戦争は、経験していない人間にも、歴史的には認識することができる。歴史認識とは過去を復元することではない。歴史は過ぎ去ったことでも、もうありえないことでもない。たしかに、アウシュヴィッツも、ヒロシマも、ナンキンも、われわれが経験したものでなく、その経験を記憶してもいない。もしわれわれが経験したものしか語れないとすると、歴史認識も歴史哲学もありえない。われわれ自らもまた、完全には認識できない未知の部分を含まざるをえない歴史の現在を生きるとすれば、そうした出来事も現在から捉えなおさねばならない。戦争の現実の経験やその記憶が重要なのではなく、「過去」と呼ばれているものを歴史的な視野で認識することが重要なのだ。それは現在を理解することだからである。

(187 頁)

第二次大戦後、時間がたつにつれて、「記憶」は薄れている。記憶とは第一義的には経験したことであるが、それは経験しなかった人々の集合的な空間で歴史化される。その空間に宿るものが、経験しなかった者たちの記憶である。たしかにヒロシマという名前は、次第に風化する。しかし風化された状態について認識することが、おそらく歴史の現在の認識のための出発点である。認識の奥行きが、もしわれわれが現に経験したものに限定されるとしたら、歴史はどんなに薄っぺらなものになるだろうか？ われわれは過去を歴史として探究すべきである。記憶の風化とは歴史の忘却である。

(189 頁)